Tokyo Gakugei University Repository
東京学芸大学リポジトリ
http://ir.u-gakugei.ac.jp/

Title	ハワイに残る日本語 : 「おご」を一例に(fulltext)
Author(s)	島田,めぐみ; 高橋,久子
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. I, 63: 81-88
Issue Date	2012-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/125472
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ　**63**: 81－88，2012.

ハワイに残る日本語

――「おご」を一例に ――

島　田　めぐみ＊・高　橋　久　子＊＊

日本語学

（2011年８月31日受理）

要　　旨

ハワイでは，料理，文化，生活に日本に起源のあるものが多く，いわゆるハワイピジンと言われるハワイの接触言語にも日本語からの借用語が多い。そのなかには，現在日本ではほとんど使用されない語もある。そこで本研究では，「おご」をとりあげ，「おご」の語史と日本における「おご」の理解度を確認し，ハワイにおける「おご」の理解度と使用実態を考察することとした。古辞書の分析より，「おご」は奈良時代より使用される語であること，室町時代以降「おごのり」が使用され始め，次第に「おごのり」が優勢になったことが，今回初めて解明された。そして，古形「おご」が方言に残り，それが移民とともにハワイにわたり，ハワイで現在も広く使用されている実態が明らかになった。また，日本人大学生256名を対象に実施した調査から，いずれの地域においても「おご」は一般的な語ではないと結論づけられる結果が得られた。一方，ハワイでの調査結果からは，日本とは対照的に，現在でもハワイでは「ogo」が広く知られていると判断できる結果が得られた。

キーワード：借用語，語史，古辞書，方言，ogo

1．研究の背景と研究の目的

日本人の契約労働者としてのハワイへの移住は1868年に始まり，官約移民の制度が終わる1894年までに約15万人の日本人が主にプランテーション労働者としてハワイに渡った。日本のほか，中国，フィリピン，ポルトガル，スコットランドからも移民がハワイに渡っているが，全人口に占める割合は日系人が４割ほどを占める時期もあった。人口割合を反映して，ハワイの料理，文化，生活には日本に起源のあるものが多く，いわゆるハワイピジンと言われるハワイの接触言語にも日本語からの借用語が多い。「bento」（弁当），「mochi」（もち），「manju」（まんじゅう）など，現在の日本においても使用されるものが多いが，なかには，現在はほとんど使用されない語もある。

ハワイで使用される日本語語彙のうち，現在の日本において一般的に使用されない語として，「hinoshi」（火のし）[注1]，「chisha」（ちしゃ）[注2]などがあげられるが，これらは主に日系人の間で使用されているものである。非日系人にも使用される日本語語彙は，ほとんどが現在日本でも使用されるか，あるいは容易に意味が理解できる語である。しかし，非日系人にも使用される語であっても，「ogo」（おご）や「girigiri」（ぎりぎり）[注3]のように，現在日本では一般的にはあまり使用されないと考えられる語もある。筆者らの知る限り，それらの語の語史，使用実態などに関する研究は行われていない。そこで本研究では，「おご」をとりあげ，「おご」の語史と

＊　東京学芸大学留学生センター
＊＊　東京学芸大学人文社会科学系日本語・日本文学研究講座

日本における「おご」の理解度を確認し，ハワイにおける「おご」の理解度と使用実態を考察する。なお，本稿では，ハワイにおける使用場面に関してのみアルファベット表記の「ogo」を用いる。

２. 先行研究

ハワイでは日本語語彙が多く使用されるが，主に日系人間で使用される語と，非日系も含め広くハワイで使用される語がある。日系人が使用する語については，安倍（1965），井上（1971），比嘉（1974），黒川（1983）などの研究がある。また，島田・本田（2006, 2008）は，ハワイで 1955 年から 1990 年までの間発行されていた日本語新聞『ヒロタイムス』に使用される日本語の特徴を分析している。これらの研究より，日本語語彙は，（１）方言の使用，（２）歴史的に古い日本語の使用，（３）幼児語の使用という特徴があることが明らかになっている。

ハワイにおける英語への借用語としての日本語を研究したものは，島田（2006），ハナシロ・島田（2011）がある。島田（2006）は，ハワイで発刊されている英語新聞 *Hawaii Tribune Herald* の中で使用されている日本語借用語について調査している。英語辞書に掲載がなく，また，英語による解説がない日本語由来の語を「ハワイで認知度の高い語」とし，33 語を認定している。これらの日本語借用語が，日系，非日系のハワイ在住アメリカ人にどの程度理解されているかを調べたものがハナシロ・島田（2011）である。ハナシロ・島田（2011）では 23 語をとりあげ，日系と非日系の理解度の違い，日系人の年代による理解度の違いを分析している。ハナシロ・島田（2011）では，本研究の対象である「ogo」も取り上げられており，日系の82.4％，非日系の33.3％が「わかる」あるいは「だいたいわかる」と回答している。

３.「おご」の語史

日本において「おご」が使用された確実な例は，奈良時代の古文書に見出される。正倉院文書，天平勝宝６年（754）頃の仏聖僧供奉料物注文に「於期」（オゴ）とある。平安時代以降の実態は，古辞書類により確認できる。平安中期成立の『本草和名』に「於古」（オゴ），平安末期成立の三巻本『色葉字類抄』に「オコ」（オゴ），鎌倉時代成立の十巻本『伊呂波字類抄』に「オコ」（オゴ），南北朝時代成立の『仮名文字遣』に「をご」とある。このように，奈良時代から南北朝時代までは，「おご」が一般的語形であったと推定される。

室町時代に簇出した意味分類体辞書，『和名集』の一類では，３種類の語形が確認される。『和名集』類中，最も早く成立した『頓要集』には「ヲコ」（オゴ），『撮壌集』には「ヲコノリ」（オゴノリ），『通要古紙』には「ヲコナ」（オゴナ），その他の『和名集』類には「ヲゴ」（オゴ）または「ヲコ」（オゴ）とある。『撮壌集』の成立は享徳５年（1454）であり，だいたいこの頃から，古形の「おご」と「のり」を複合させた，「おごのり」という語形が使用され始め，数種類の語形が併用されていたことが分かる。室町末期成立の『運歩色葉集』に「ヲゴ」（オゴ）とある。『色葉字』類の一類であり，室町末期から江戸初期に成立した『猪無野本伊呂波集』には「ヲコノリ」（オゴノリ）・「ヲゴ」（オゴ）両形が示されている。室町時代後期に最も盛行した古本『節用集』諸本は，「ヲゴ」（オゴ）または「ヲコ」（オゴ）とあり，ほぼ古形を維持している。

江戸時代の辞書では，『節用集大全』・『書言字考節用集』・『早引永代節用集』等，「をごのり」または「ヲゴノリ」とあり，「おごのり」が優勢となっていった状況が観察される。辞書以外の文献資料では，俳諧作法書である『毛吹草』に「オゴノリ」，『本朝食鑑』に「オゴノリ」とある。[注4]

この「おご」及びそのヴァリエーションは，方言資料にも散見する。弘化４年（1847）成立『重訂本草綱目啓蒙』に「江蘺ハ尾州ノヲゴノリナリ，一名ヲンゴ〈紀州〉，ウゴ〈播州原村〉，ウゴヽブ〈同上姫路〉」とあるのをはじめとして，以下の語形が，方言として確認されている。[注5]

1847　紀州「ヲンゴ」 播州原村「ウゴ」
1900　新潟県佐渡「イゴ」
1924　和歌山県西牟婁郡「オオゴ」
1931 ～ 8　長崎県南松浦郡「オゴ」
1970　山形県東田川郡「オゴ」

1976　　香川県「オゴ」 香川県小豆島「オオゴ」
2011　　広島県福山市松永地方「オゴ」

以上から，「おご」の語誌を総合的に考察する。奈良時代以来，日本語の文献に記載された，奈良・京都を中心とした中央語では，「おご」が一般的語形であった。室町時代中期に「おごのり」という複合語形が現れ，江戸時代には，これが一般化した。しかし，各地の方言には，古形「おご」も残存し，現在に至っている。

ハワイにおいて生きて使用されている「おご」は，この，方言に残存した古語が，移民によってハワイにもたらされたものと考えられる。

4. 日本における理解度調査

2011年4月から5月にかけて，東京学芸大学の大学生を対象に，ハワイで使用される日本語（おご，ちしゃ，しび[注6]）について，知っているか否かを回答するアンケート調査を実施した。「知っている」と回答した場合は，その意味を書くよう求めた。回答者数は，256名である。回答者の育った場所は，表1のとおりである。「その他」は，複数の都道府県での居住経験がある者，帰国子女が含まれる。偏りはあるものの，回答者の育った地域は日本全国の広範囲にわたる。「おご」について「知っている」と回答した者はおらず，表1の256名全員が「知らない」と回答している。この調査結果から，大学生の年代に関し，いずれの地域においても「おご」という語は一般的ではないと考えることができる。

表1　日本における調査対象者 生育地別人数

都道府県	東京	その他	神奈川	埼玉	静岡	千葉	栃木	茨城	秋田	新潟	青森
回答者数	42	30	19	13	10	10	10	9	8	8	7
都道府県	富山	長野	山形	群馬	広島	福島	愛知	熊本	高知	福井	山梨
回答者数	6	6	6	5	5	5	4	4	4	4	4
都道府県	岩手	沖縄	鹿児島	岐阜	北海道	宮城	鳥取	福岡	三重	宮崎	山口
回答者数	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2
都道府県	和歌山	愛媛	大分	岡山	佐賀	徳島	長崎	兵庫			
回答者数	2	1	1	1	1	1	1	1			

5. ハワイにおける理解度調査

2011年3月，ハワイ在住アメリカ人を対象にインタビューを行い，下記質問への回答を求めた。

1）「ogo」を知っているか
2）「ogo」は何語だと思うか
3）写真を見せてどれが「ogo」だと思うか

調査対象者は，ハワイ在住アメリカ人7名である。日系2世が2名，日系3世が3名，非日系が2名である。

回答者全員，「ogo」を「知っている」と回答し，「日本語である」と回答した。質問項目3）では，a. 緑色の「ogo」，b. 赤い「ogo」，c. ワカメの3種類の写真を示した。その結果，「ogo」が海藻の一部ではなく，「ワカメも含め海藻すべてが「ogo」だ」と回答した者が2名いた。なお，オゴを「limu manauea」であるとハワイ語の正式名称を述べた者は1名であった。

本調査の対象者は7名と少ないものの，全員が「ogo」を知っており，ハワイにおいて「ogo」の理解度が高いことが推測できる。

６．ハワイでの使用

ハワイでは，「ogo」を日常的に見聞きするが，ここではその例を検討する。最初に，ハワイの海藻の解説書を見てみる。Abbott（1984）では，下記のとおり，「ogo」のハワイ語名「Limu Manauea」の解説文に「Other common names: ogo」とあり，ここからも「ogo」が一般的に使用される語であることがうかがわれる。また，日本語では，「おごのり」であることも記載されている。なお，「limu」は，海藻を意味するハワイ語である。

> Limu Manauea (erect branches — allusion unknown).
> Gracilaria coronopifolia
> Name used on all islands.
> Other common names: ogo (Japanese name — ogo nori — for species of Gracilaria).
>
> （Abbott, 1984:31）

次に，ハワイにおいて，「ogo」が使用される例を見ていく。まず，図１は，2011年3月にハワイ島ヒロのスーパーマーケット KTA で販売されていた「SANBAI MIX WITH OGO」という漬け物である。商品名の「SANBAI」は「sambai-zuke」（三杯漬け）の略と考えられる。図１のパッケージに食材として「Ogo（Fresh Hawaiian Seaweed）」と記載されているのがわかる。「ogo」の説明として「Fresh Hawaiian Seaweed」と印字されているが，上記のハワイ語「limu manauea」の文字はない。

図１：SAMBAI MIX WITH OGO

「ogo」がもっとも一般的に使用されるのは，poke という料理である。poke は，代表的なハワイ料理のひとつで，マグロなどの魚を醤油やごま油につけ，「ogo」やタマネギの薄切りなどとあえたものである。Choy & Meahl（2004）は poke の料理書であるが，「Seared‘Ahi and Macadamia Poke」（まぐろのたたきとマカダミアナッツのポケ）の食材一覧に「１ cup rinsed and chopped ogo seaweed」の記述がある。

最後に，ハワイピジンを紹介する書籍の例をあげる。Johnston（1981）は，ハワイピジンの語をアルファベット順にあげ，解説している。「ogo」に関しては，次のように記載されている。カッコ内は，発音のしかたを示したものである。「limu」は，先述のとおり海藻を意味するハワイ語である。

OGO（OH go）Limu

（Johnston, 1981）

そのほか，レストランのメニューなどにも「ogo」の文字は観察されるが，上記の poke の食材にもあるように「ogo seaweed」と記載されたり，「SANBAI MIX WITH OGO」の例のようにカッコ内に「seaweed」であると説明されたりする場合も多い。また，本研究での観察では，食材や料理名にハワイ語の「limu manauea」が使用される例は認められなかった。

7. 終わりに

「おご」は奈良時代より使用される語であること，室町時代以降，「おごのり」が使用され始め，次第に「おごのり」が優勢になったことが，古辞書の分析から今回初めて解明された。そして，古形「おご」が方言に残り，それが移民とともにハワイにわたり，ハワイで現在も広く使用されている実態が明らかになった。また，今回の調査より，日本とは対照的に，現在でもハワイでは「ogo」が広く知られていると判断できる結果が得られた。しかし，ハワイでの調査対象者数は限られており，さらなる調査が求められる。また，「ogo」と「ogo seaweed」の使い分けなどに関しても疑問が残る。これらに関しては，今後の課題としたい。また，「おご」のほか，「ぎりぎり」「ちしゃ」などについても，同様の調査を行い，ハワイにおける日本語の解明に迫りたい。

注

1 アイロンの意。

2 レタスの意。

3 つむじの意。

4 古辞書及びその他の文献の具体的記述は，以下の通りである。

[古辞書]

(1) 寛政 8 年（1796）版本草和名
「海藻…和名之末毛，一名爾岐女，一名於古」

(2) 尊経閣文庫蔵永禄 8 年（1565）写二巻本色葉字類抄
「於期（ヲコ）〈海苔名〉」

(3) 黒川本色葉字類抄（江戸中期写）
「於期菜〈オコ，海苔名也〉」

(4) 早稲田大学蔵花山院本伊呂波字類抄（江戸中期写）
「於期菜〈オコ，出本朝式，海苔名也〉」

(5) 大東急記念文庫蔵十巻本伊呂波字類抄（室町初期写）
「於期菜〈オコ，出本朝式，海苔名也〉」

(6) 天理図書館蔵二巻本世俗字類抄（江戸中期写）
「於期菜〈海藻名也〉」

(7) 東京大学国語研究室蔵二巻本世俗字類抄（江戸末期写）
「於期菜〈海惹名也〉」（「惹」は「苔」の誤）

(8) 東京大学国語研究室蔵文明11年（1479）本仮名文字遣
「をこ　於期〈海草也〉」

(9) 国立国会図書館蔵慶長（1596 ～ 1615）版仮名文字遣
「をご　於期〈海藻也〉」

(10) 頓要集（室町中期写）
「於期（ヲコ）」

(11) 無窮会神習文庫蔵撮壌集（江戸時代写）
「於期菜（ヲコノリ）」

(12) 宮内庁書陵部蔵撮壌集（江戸中期写）
「於期菜（ヲコノリ）」

(13) 東京大学文学部国語研究室蔵撮壌集（江戸中期写）
「於期菜（ヲコノリ）」

(14) 有坂本和名集（室町時代写）
「期菜（ヲコ）」（「期菜」は「於期菜」の誤）

(15) 広島大学本和名集（室町末期写）
「鬼髪（ヲゴ）」

(16) 亀井本和名集（慶長20年〈1615〉写）
「於期（ヲゴ）」

(17) 桂本佚名古辞書（文亀 2 年〈1502〉写）
「海髪（ヲコ）」

(18) 通要古紙（室町中期写本の天明 3 年〈1783〉影写）
「於期菜（ヲコナ）」

(19) 天理図書館本和名集（室町末期写）
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(20) 天理図書館蔵国籍類書字書（寛永 3 年〈1626〉写）
「鬼髪（ヲゴ）」

(21) 元亀 2 年（1571）本運歩色葉集
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(22) 静嘉堂文庫蔵運歩色葉集（室町末期写）
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(23) 猪無野本伊呂波集（江戸初期写）
「於胡菜（ヲコノリ）」
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(24) 温故知新書（室町中期写）
「於期（ヲコ）〈水草〉」

(25) 塵芥（永正 7 年〈1510〉以後宣賢自筆）
「於期（ヲコ）〈海草〉」

(26) 増刊下学集（室町中期写）
「於期（ヲコ）〈海藻也〉」

(27) 明応 5 （1496）年本節用集
「於期（ヲゴ）〈海藻也〉」

(28) 伊京集（室町末期写）
「於期（ヲゴ）〈海藻也〉」

(29) 天正18年（1590）本節用集
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(30) 早大本節用集（江戸初期写）
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(31) 阿波国文庫本節用集（室町末期写）
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(32) 増刊本節用集（慶長13年〈1608〉写）
「於期（ヲコ）〈海藁〉」（「藁」は「藻」の誤）

(33) 枳園本節用集（室町末期写）
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(34) 易林本節用集（慶長 2 年〈1597〉刊）
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」
「於期（オゴ）」

(35) 宮城図書館蔵辞林枝葉（江戸初期写）
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(36) 尊経閣文庫蔵辞林枝葉（江戸初期写）
「於期（ヲゴ）〈海藻〉」

(37) 慶長17年（1612）林羅山自筆草稿羅浮渉猟抄多識編
「海藻（シマモニキメ）〈オコ〉」
(38) 延宝 8 年（1680）刊合類節用集
「海鬘（ヲゴ）〈藻也〉」
(39) 恵空編延宝 8 年（1680）刊節用集大全
「於期菜（をごのり）〈和名類聚鈔序曰，海苔之彙於期菜等〉」
(40) 享保 2 年（1717）刊書言字考節用集
「海髪（ヲゴノリ）〈見本草，出伊〉　於胡菜（同）〈延喜式〉」
(41) 天保14年（1843）刊早引永代節用集
「海髪（をごのり）　於胡菜（をごのり）〈延喜式〉」
(42) 明治19年（1886）刊ヘボン和英語林集成第 3 版
「OGO　ヲゴ　海髪 n.　A kind of sea-weed prepared and used for food.」
［古辞書以外の文献資料］
(43) 正倉院文書，天平勝宝 6 年（754）頃の仏聖僧供奉料物注文（大日本古文書 13）
「紫菜（むらさきのり），海松（みる），布乃利（ふのり），於期（おご）」（括弧内の傍訓は，仮に高橋がつけた読み）
(44) 日葡辞書（1603年刊）
「Vogo（ヲゴ）。または，Vogonai（ヲゴナイ）ウミノ モ〈訳〉海藻の一種」
(45) 俳諧古今抄（1730），巻上，再撰貞享式
「春之部…桜海苔　甘海苔　海髪（ヲゴ）」
(46) 大抵御覧（1779）
「この翁をつくつくと見給に，白髪乱ておごのごとし」
(47) 毛吹草（1638）
「於期苔（オゴノリ）」
(48) 本朝食鑑（1697），巻 3
「於期苔（オゴノリ）（注文略）」
(49) 弘化 4 年（1847）刊重訂本草綱目啓蒙
「乾苔　アヲノリ　イトアヲサ〈佐渡〉　カハナ〈南部〉〔一名〕苔脯〈気味〉　柔苔〈同上生〉　青苔〈海藻条下〉　緑苔〈文選海賦〉　海苔菜〈本草彙言〉／海中ニ生ス，繊細緑色陟釐ノ如シ，収メ乾シテ方物トス，勢州多ク出ス，諸州出ストコロ各小異アリ，尾州ノ長アヲノリハ長サ一尺余，土州四万十（ワタリ）川ノ産ハ長サ五六尺，尾州ノサヽハノリハ形簪葉（チマキザサ）ノ如ク乾シナス，播州網干ノサヽノリモ同形ナリ，コレヲ一名アボシノリ，サヽノハノリトモ云，淡州ヨリモ出，アヲノリニ極テ細キト粗キトアリ，サヽノリハ粗シ，其粗ナル者ヲ，ガニノス〈備前〉ト云，一名アヲサ〈紀州〉，阿州ノアヲノリハ微黒色ヲ帯，小豆島ノ産ハ短クシテ闊シ，防州，土州ノ産ハ闊シテ長ク緑色深シ，〔集解〕江蘺ハ尾州ノヲゴノリナリ，一名ヲンゴ〈紀州〉，ウゴ〈播州原村〉，ウゴヽブ〈同上姫路〉，形円ク細クシテ，ウミ索麺ノ如シ，黒色微青ナリ，灰ヲ加ヘ煮ルトキハ緑色トナル，晒シ乾セバ白色トナリ，甚細ク麻ノ如シ，或ハ五色ニ染売，江蘺，一名頭髪菜〈間情偶寄〉」

5 方言資料は以下に依拠した。
（1）重訂本草綱目啓蒙　小野蘭山　1847
（2）方言訛言取調書　本間・柴野他　1900
（3）紀州魚譜　宇井縫蔵　1924
（4）方言　1931 ～ 1938
（5）山形県方言辞典　山形県方言研究会　1970
（6）香川県方言辞典　近石泰秋　1976
（7）http://kabuse.y7.net/food/ogo.htm（2011年 8 月26日閲覧）

6 まぐろの意。

参考文献

安倍勇（1965）「ハワイと日本語」『言語生活』166，81-88

井上史雄（1971）「ハワイ日系人の日本語と英語」『言語生活』236，53-61

黒川省三（1983）「ハワイの日本語」『現代方言学の課題　社会的研究篇』，199-220，明治書院

島田めぐみ（2006）「ハワイの英語新聞に見られる日本語からの借用語」『東京学芸大学紀要人文社会科学系Ⅰ』第57集，115-123

島田めぐみ・本田正文（2007）「ハワイ日本語の語彙的特徴」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第58集，483-493

島田めぐみ・本田正文（2008）「日本語新聞に見るハワイ日本語の特徴」『東京学芸大学紀要総合教育科学系』第59集，513-524

ハナシロ・チャド・島田めぐみ（2011）「ハワイにおける日本語語彙の認知に関する研究」修剛・李运博（編）『異文化コミュニケーションのための日本語教育１』597-598

比嘉正範（1974）「ハワイの日本語」『現代のエスプリ』85, 178-197

Abbott, I. A. 1984. *LIMU*. Lawai: National Tropical Botanical Garden

Choy, S. and Meahl, E. 2004. *Sam Choy's A Little Hawaiian Poke Cookbook.* Honolulu:Mutual Publishing.

Simonson, D. 1981. *Pidgin to Da Max*. Honolulu: Bess Press.